

第1回講座 令和2年10月20日(火) 午後3時～午後4時30分

学習指導要領

J-SHINE 専務理事(上智大学言語教育研究センター 教授)

藤田 保

【講座内容の書き起こし】

高野先生：

皆さん、こんにちは。明海大学副学長・外国語学部長の高野と申します。本事業の責任者をしております。本日、こうした講座が始まるにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

本講座は、明海大学が文部科学省の委託を受けて実施する、「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成確保事業」の一環で実施するものです。本講座については、小学校英語指導者認定協議会 J-SHINE の協力のもと、これまで本学と連携して様々な事業を展開してまいりました東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市の小学校の先生方に提供するプログラムとなっています。

本日から始まる本講座は、12月までにかけて5回のプログラム構成となっています。ご参加される先生方におかれては、5回の講座に参加していただき、小学校英語を教室で指導される際の参考としてほしいと願っています。全てのプログラムは、Zoomを使用して、各講師の先生方の行う講義をリアルタイムのオンラインで視聴していただきますが、先生方におかれましては、適宜こうしたリアルタイムの動画視聴とともに、講義の先生方との質疑応答、さらには講座内で準備されているタスクにも挑戦していただきたいと思っています。なお、動画の撮影と配信につきましては、株式会社モアカラー様から行っています。併せて、参加される先生方に対しては、本講座のウェブサイトもご用意しております。講座参加前と後にタスクも紹介されていますので、必ずアクセスしていただきたいと思います。

それでは、ここから第1回講座内容と、講師の方の紹介をさせていただきます。

第1回の講座内容は、学習指導要領に記されている外国語科・外国語活動の目標・内容等を理解する講座となっています。講座の中では、講師とのやり取りも随時行いたいと思っています。

講師の方です。講師は、J-SHINE 専務理事の藤田保 上智大学言語教育センター教授です。藤田先生のご専門は、言語学・外国語教育で、著書としては、『小学校英語教科化への対応と実践プラン』(教育開発研究所)、『グローバル教育を考える小学校英語のゆくえ、賛否を超えて意識すべきこと』(アルク)など、多数あります。また、各種シンポジウムでも、小学校英語に関してのご講演を活発にされています。さらに、東京都教育委員会の英語に関する各種検討委員会も歴任されている方です。

それでは、これから藤田先生の講座が始まりますので、よろしく願いいたします。

藤田先生：

皆さん、こんにちは。上智大学の藤田と申します。よろしく願いいたします。先ほどの紹介の中にあつた J-SHINE では、専務理事を務めさせていただいております。

この5回のシリーズの中の1回目ということで、私はこの後に続く4回の一種の前座という風に考えていただいているのかなとも思っています。学習指導要領を通じて、今、小学校の英語が何を目指しているのかということを確認していただきたいというのが、今日の主たる趣旨です。先生方には、事前にまずは1回ご確認いただきたいというのが課題の1つ目でした。

そしてもう1つの課題として、ここに挙げさせていただいた福島県いわき市にある平五小という小学校（いわき市立平第五小学校）は、私たちJ-SHINEが、一昨年少し指導に入るといような形でお手伝いさせていただきました。その記録の一部分をビデオにまとめてあるので、ぜひそれをご覧になっていただき、メインで教えている大和田先生の教え方がどう変容していったかということを考えていただければと思います、課題にさせていただきました。

そこで、もうすでに先生方にも見ていただいていると思いますので、それぞれの会場で近くに座っている先生方と、この先生がどういう風に変ったのか、あるいはビデオを見て先生方自身がどのように感じられたのかということ、少しお互いにシェアしていただきたいと思います。今から3分くらいでお話をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（事前課題について参加者同士の話し合い:3分）

藤田先生：

皆さん、そろそろいかがでしょうか。本当はここで、先生方がどういうことを話したのかを、いくつかのグループの方に実際にお伺いしたいと思うのですが、こちらから簡単にお話をします。実を言うと、ビデオのはじめと終わりくらいの間は、約3カ月くらいです。ですから、大変短い期間ではあったのですが、まず先生が、最初の辺りで少し引いてしまっているというか、あまり積極的に前に出ずに、ALTの人によっと任せてしまいがちな感じであったのが、後半になってくると、先生の方がどんどん積極的に英語を使って、子供たちに話しかけていくといった積極的な態度が、先生方も見られたのではないのでしょうか。そういった先生の態度が、おそらくクラスにいる子供たちにも、伝わっていくのかなと思います。

今回学習指導要領が求めている内容について、これからお話しさせていただきますが、実際小学校で求めているものは、担任の先生が「英語のエキスパート」であることを求めているわけではないのです。むしろ、そこで積極的に関わっていくような力、それを先生がある意味「ロールモデル」のような形で見せていく。そして、それによって子供たちが変わっていく。そのようなことが実は大事なのではないだろうかということが、見て取ってもらえたら思っています。

では、ここから実際の内容に入っていきたいと思います。まず、学習指導要領の実際の文言に入る前に、背景的な部分の説明を少ししたいと思います。

様々なところでご覧になった先生方も多いかもしれませんが、これからの未来予測として、実際の子供たちがこれから10年後、20年後となった時に、もしかすると今あるような仕事とは違った形の仕事に就く可能性があるかもしれません。例えば、今年はコロナ禍の中で、「Uber Eats」といような仕事に従事する人たちが非常に増えました。5年前の私たちが、このような仕事をあちらこちらで見かけるようになるとは、思っていなかったかもしれません。実は、時代に合わせて、そのような様々な形態の仕事が出てくるかもしれないということがあります。あるいは、その背景として、今回はテレワークという働き方が、日本中のみならず世界中で行われるようになってきました。同じような形で様々なことが自動化し、AIがどんどん進んでいます。2045年には、AIの知能が人間を追い越すかもしれない「シンギュラリティー」という言い方もよく耳にします。2045年というと遠い未来のように感じますが、25年先、というと、今10歳の子たちは35歳になります。まさに、社会の中でこれから社会の中で活躍していこうという時期に、機械の方が人間を追い越すという状況に、対応していかなければいけないということも考えなければいけないかもしれません。そして、それによって労働時間も変わっていくことになるかもしれません。

まとめると、私たち大人が経験してきたことをベースにして、今の子供たちの未来のことを考えてはいけないうのでしょう。そうすると、教育で与えなくてはいけないことについても、私たちがかつて受けていたものとは違ったものを考える必要があるということになります。その子供たちが向かっていく世界に関して、OECD等で使われていた言葉で「VUCA World」という言い方がされています。これは、それぞれの頭文字を取って、「Volatility(変動性)」、「Uncertainty(不確実性)」、そして「Complexity(複雑性)」、なおかつ「Ambiguity(曖昧性)」、そういった世界、つまり一言でそれを

表すと、今まで誰も見たことも経験したこともないような、正解というものが無い時代になってくるということです。

かつては、自分たちの先輩の背中を見て、こういう風にやっていけばその先にこういう世界が待っているんだ、ということがある程度予測ができました。しかしながら、AI、コンピュータ、ロボットといった世界になってくると、私たちの先輩たちは別にロボットだったわけではないわけですね。そうなってくると、子供たちは何を見ればいいのか、ということになってきます。

そこで、子供たち自身が自ら考えて判断する、といったことが求められてくるということが、英語に限らず全ての教科において、学習指導要領のベースになっている考え方なのです。そして、今回は先生方もご存知のように、3つの柱が学習指導要領のベースになっています。そして、その中の一つである「知識・技能」と呼ばれるものは、私たちが従来学力と考えていたものに近い考え方だと思いますが、一体何を知っているのだろうか、何ができるのだろうかということです。例えば、英語で言うと、単語を知っています、文法を知っています…これは知識があるということです。読める、書ける、聞けるといったことは、スキルがある、何かができるという技能です。今までであったら、文法がわかって、単語を覚えて、そして読めて書ければ、もうそれ以上何が必要ですか、と考えていたかもしれません。これは当然大切なことではありますが、それだと三方の中の1つにすぎないのです。

そこで身に付けて覚えたものをどう活用するのか、ということが、図の緑色の部分の「思考力・判断力・表現力等」と呼ばれているものです。理解したことをどう活用するのですか。単語や文法を使って、文の作り方を学びました。でもその文を使って、あなたはどのような考えを他の人に伝えたいと思っているのですか、ということです。伝える内容がなければ、その形式を覚えても意味をなさないのではないのでしょうか。算数で数式を覚えて終わりではなくて、日常生活の中で、その計算がどういった形で生きてくるのかということを考えていく必要があるのです。これはすべての教科について言えることです。しかし、それだけでは実は足りません。

オレンジ色で書いてある部分ですが、「学びに向かう力、人間性等」のように、社会や世界と関わって、よりよい人生を送っていく。その物事に対して自分がどのようにして関わっていくのかということです。例えば、その単語を覚えました、それによって素晴らしい文を作って、素晴らしい考えが頭の中にでき上がりました。でも自分の頭の中にしかなければ、誰の目にも止まりません。誰の耳にも届きません。結局何もないのと同じであって、それをきちんと他の人に対して伝えていこうという意欲、あるいは他の人がそういった素晴らしい考えをもっている時に、それに耳を傾けようという意欲、それがなければせっかくできた素晴らしい考えも、全て宝のもち腐れになってしまうのではないのでしょうか。ですから、その3つが全て揃って初めて、学校で学んだことが、実際の世の中や社会に出てから役に立っていくことにつながるのではないだろうかというのが、基本的な考え方です。今お話したことがこの図でいうと、何ができるようになるのかということなのです。

そして、「知識・技能」とは、生きて働く知識や技能でなければいけない。あるいは、「思考力・判断力・表現力」とは、未知の状況にも、先ほど「VUCA World」の話もしましたが、今まで先生に言われたことがないような世界に直面した時に、どう自分で判断するのかということです。そして、学んだことを、人生や世界で生かそうとする力、意欲を、学校にいる間にできるだけ身に付けてほしいということです。

その次に、「何を」という内容に関しては、今までとそんなに大きく変わっていません。

そして、最終的にそれをどのような形で学んでいくのかというのが、ここで出てくる「アクティブ・ラーニング」と呼ばれているものです。アクティブ・ラーニングとは、実は元々答申の中で出てきたときには、大学の講義に対する要望だったのです。つまり、教授がテキストなどを読み上げながら、一方的に話して終わり、といった講義形式だけではだめだということです。むしろ、学生同士で話し合ったり、彼らが自分で調べたことを発表したり、お互いに学び合ったりといったことを取り入れなければいけない、ということが、初めは大学教育に対して言われたのですが、考えてみるとそれは、高等学校でも中学でも小学校でも必要なことであり、全てのレベルの教育段階で取り入れていきましょう、ということに

なりました。

初めは、このアクティブ・ラーニングという言葉が使われていましたが、実際に学習指導要領に載るときには、「主体的・対話的で、深い学び」となりました。先生方は中学校の英語の文法で、受動態・能動態を学んだことがあると思います。英語では、受動態のことを「passive voice」、それに対して、能動態を「active voice」と言います。実は、アクティブ・ラーニングの「アクティブ」とは、その「アクティブ」を意味するのです。アクティブというと、何か子供たちが教室のあちこちで、走り回ったりすることではありません。つまり、受身なものではなく、子供たち自身が自ら関わっていく、そういったことを「アクティブ」と言い、それが「主体的」という意味です。先生ではなくて、学習者である子供たちが主体になって、子供たち同士、あるいは子供たちと先生が対話をしたりしながら学ぶことによって、その学んでいく内容を進化させていこう、深めていこう、という考え方なのです。

つまり、このアクティブ・ラーニングを通して、様々なものを身に付けさせていきたいということなのです。自ら主体的に働くといった「主体性」であったり、友達と一緒に話し合うことによって「協働性」や、新しいものを生み出していく「創造性」であったり、そこで個々の段階で判断をしていく「自己決定力」や「問題に取り組む力」、そして最終的に「自分を伸ばしていく力」を身に付けていきたい、ということをおねらっているということです。

そして、このような授業を展開するうえでの方向性としては、こういう形でまずは学習課題を提示して、それに対して見通しを立てて自己解決して、協働解決して、一斉点検をしてまとめと振り返りをしていくというのが基本的な流れです。例えば、今回先生方にも事前課題として、ビデオを見ておいてください、その内容について考えてくださいという課題を提示しました。それに対して、「私はこう思う」、ということを考えていく、それが見通しを立てて自分で解決をしていく、こういうことではないかということです。そしてそれぞれが、自分で考えたことをお互いに、「私はこう思いました」、「こう思います」というようにお話しいただいたのが、ここで言う「協働解決」の部分です。それを本当であれば、先生方から発表していただきながら、お互いに点検して、確認し合って理解してまとめていくのですが。先ほど冒頭でやったプロセスというのは、まさにこういうことです。つまり、アクティブ・ラーニングとか、主体的・対話的とか言うのと、とても難しいことをやらなければという気になるかもしれませんが、実はそうではなくて、このような流れで、手順を踏んでいながら、実現していくということです。

そして、このようなアクティブ・ラーニングにおいて、アクティブと言うと、「～を通して身に付けるべき」ということがなぜ言われるのかということ、これもどこかでご覧になった先生方も多いのではないかと思います。実は昔から言われている、ブルームの教育目標で、それぞれの段階を経て、学習、学んでいくことが行われていきます。その中で、一番下のレベルにあるのが、出てきたものを覚えるということです。例えば先ほど言ったように、単語を覚える、文法を覚える、ということです。次に、その文法とかを理解したかということを確認するために、本文を読んでみましょう、といったことで理解をする、本文の理解をする。そして、本文を読み終わったあとで、その後についている練習問題などを使って、応用問題を解いてみましょう、といった形で進めていく。我々は、ずっとそういった教育を受けてきました。そういう手順でやってきました。しかし、ここまでというのは、どちらかと言うと、何となく自分で改めて何かを考えるのではなくて、与えられたものをとにかくこなしていくという要素が強いのです。ですので、あまり思考力がそれほど必要とされません。これは「下位思考スキル」、英語でいうと、lower order thinking skillsという言い方をしますが、そのようなことを言われます。でもそこからさらに先に、分析をする。例えば、読んだ文章について、自分なりの分析をして、それを例えば他のものと比較をすることによって、評価をしてみる。そして、そこで出てきたような内容について、自分なりの文章を作ってみる、想像してみる、そうすると、これは判断力や表現力、思考力といったようなものが要求されるようになります。こういうことが、「上位の思考スキル」、higher order thinking skills です。つまり、三角形の図でいうと、知識・技能だけでなく、思考・判断・表現のようなものです。そうすると、その下位の思考スキルに加えて、上位の思考スキルということも、どちらも必要で、そちらまでもっていききたいという考え方ということです。

それを実現するにあたり、これもラーニング・ピラミッドという話もよくあります。授業形式として、例えば授業を聞く、

先生の話を書く、というのが一番上にあります。でも、それよりも、ただ聞いてそれでおしまいだと、その場では何となくわかった気がするかもしれませんが、しばらくたったら忘れてしまうかもしれません。でもその下にある、文献を読むというような形で、例えば教科書も予習をして、自分で教科書読んだうえで、先生の話、授業を聞くと、よりよく理解できるかもしれません。あるいは、記憶にも残りやすいかもしれません。しかも、話を聞くと、ただ単に音だけで聞いているだけでなく、今もこのようなスライドを先生方は見ていらっしゃいますが、視聴覚教材、ビデオなどを見ることによって、ただ話を聞いたり、本も文字で読んだりするだけよりも、よりビビッドに記憶に残る可能性もあるでしょう。さらに、ビデオで他人がやっているのではなくて、例えば目の前で先生が実際にやってくれるということになると、より印象も強くなり、さらに理解が深まっていくのではないだろうかということです。

ここまでの段階、つまり聞いたり、読んだり、見たりすることは、生徒側からすると、実は作業としては受身ということです。しかし、さらにその先で、学んだことについてみんなで話し合ってみましょう、そして話し合ったことを実際に外に行き行って試してみよう、やってみよう。そして、そうやって学んだことについて、実はこういうことがあった、こういうことを知った、面白いよ、とクラスメートに伝えたり、他のクラスだったり、あるいは低学年のことに教えてあげたりするといったことをすると、より理解が定着していくのではないのでしょうか。

先生方は皆さん経験があると思いますが、自分がわかっているからと言って、うまく説明できるとは限りません。人に教えるというのは、実はとても難しいことだというのは、先生がもう日々経験されていることだと思います。そうやって人に教えるためには、本当に自分の頭を整理しなければならないのです。そのように考えていくと、後半にある参加型の学び、これこそが実を言うと先ほどから話に出てきている「アクティブ・ラーニング」であり、実際に生徒たちがこのようなことを授業の中で体験していくことで、深い学びにつなげていくことを目指しましょう、ということが英語に限ったことではなく、今回の学習指導要領の実は肝の部分ということです。

そうした背景を受けて、実際に英語という教科、小学校の外国語とは、どういったことなのでしょう。英語のレベルを考えるにあたってはヨーロッパの Council of Europe で出している CEFR を用います。レベルとしては、A1、A2、B1、B2、C1、C2 という6段階に分けています。日本で言うと、例えば英検では、A1は英検の5級から3級くらいのレベルで、A2が準2級、B1が2級、B2が準1級、C1が1級くらいというイメージだと、日本人にはなじみがあるかもしれません。小学校の中学年段階では、大体週1回の授業をやりながら、「聞くこと」、そして「話すこと」といった音声を中心にやっていき、英語に慣れ親しんでいきましょう、ということです。そして高学年になると、そこにさらに「読むこと」、「書くこと」という文字の学習が含まれていきます。そして、ある意味では、小学校から中学校へのつなぎといった位置付けに段々なってくるということです。

中学校では、これまでできるだけ高等学校では、授業の前提は英語でやりましょうと言われていたことが、中学校でも基本的には英語で言語活動をやっていきましょう、となります。そして高等学校でも同じような形ですが、それをさらに高度化していき、もう少し高度な言語活動をやっていきましょう、となっていきます。

そして、それぞれのレベルでどのくらいの語彙を扱っていくかという、従来は中学校で1,200語、高等学校で1,800語で、中高で3,000語くらいは扱っていくことになっていたのが、今度は小学校段階で、600語～700語、中学で1,600語～1,800語、高等学校で1,800語～2,500語ということで、全体で4,000語～5,000語くらいを扱うことになりました。そしてこのような形になると、語彙数が増えるので、負担も増えるといった捉え方をされる場合が非常に多いのですが、必ずしもそうではなくて、単語数が増えるというのは、表現の幅を増やしていくことができるということなのです。語彙の指導にあたっては、易しいものから難しいものに、これは当たり前ですが、実はその次の部分が大事なところで、聞いたり読んだりすることを通して、意味を理解できるように指導すべき項目ということと、話したり書いたりして表現できるように指導すべき事項があることに留意すること。これは、専門家の間では当たり前のようにずっと言われていたことですが、このように明示的に学習指導要領に掲載されたのは今回が初めてです。それはどういうことか

と言うと、受容語彙と産出語彙を区別しましょう。つまり、聞けばわかる、見ればわかる、という言葉と、自分が使うことができる語彙を分けましょうということです。これは、漢字でも同じことが言えます。読めても書けない漢字は、たくさんあります。つまり、読めるものは全て書けなければならないのではなく、それを区別するということです。

しかし、今までは、中学校の教科書で新出単語という形で出てくると、とりあえず全部覚えなくては行けないし、全部単語テストなんかでスペリングまで覚えなければならない、と思っていたかもしれません。でもそれを区別することによって、先ほど語彙数が増えたというのは、例えば、語彙数が限られていることによって、難しい単語があれば、ここでは排除しておきましょう、という形になってきたということです。例えば、宇宙の話をするときに、地球はearth、月はmoon、太陽はsun、あるいは星はstar、くらいまでは扱っていたかもしれませんが、太陽系の惑星がそれぞれ何かと、いうところまでは扱ってこなかったかもしれませんよね。そこまで全部覚えるのは大変だし、逆に言えば太陽と月としななかったら、話が非常に限られてしまうわけです。でもそれが、NeptuneやSaturn、Marsといった惑星の名前のうち、どれが火星で、どれが土星で、と全部を使いこなせなくても、それが惑星の名前だということが理解できるだけで、例えば宇宙を扱う物語などでは、ずっと理解の幅が広がってくるのです。つまり、扱える語彙の幅をはじめから広げておいた方が、学習の内容も豊かになっていくのではないだろうか、ということです。

そして、そのような語彙を扱うために何をするかと言えば、いろいろな内容について面白い話を取り入れていくにあたって、小学校高学年になると、実は他教科では社会科や理科など、様々な教科の中でかなり高度な内容まで、実は扱っているものです。それが英語だからと言って、急に内容のレベルがあまりにも低学年向けのような話題になってしまったら、当然、子供たちもなんだ、そのくらい、ということになってしまうわけです。ですから、普段から他科目で学んでいるような内容であったり、学校の行事に関わるような内容であったり、つまり子供たちにとって本当に親しみももてるような内容を扱ってあげる。そのためにも、語彙がある程度必要になってくるというわけです。そうすると、知的レベルをそれほど下げずに、易しい言葉はある程度使いながら扱っていくということも、可能になるでしょう。

ですから、その意味ではいろいろな教科を横断的に扱っていく、「教科横断型の学習」ができるということが、実は大事になってくるのです。こうした形で、日常生活、風習、歴史、社会、自然、文化とか、そういうものも扱っていきましょう、ということが言われているのです。例えば、小学校の英語で食べ物をテーマに話をするときに、単にtomatoとかspaghettiなどと言って終わるのではなくて、様々な科目、教科、小学校で学んでいることと結び付けていくことができるかもしれません。料理の話をするなら、例えば大きじ2分の1といったら、分数の話題にもなるかもしれないし、当然、食物連鎖の話や発芽といった話は理科の話題であるし、あるいはその食べ物が出てくるような、物語とか詩といった国語で読むことになるかもしれません。また、その食べ物の産地はどこだろうと言ったら、社会科の話にもなるでしょう。そういった食べ物の絵を描いてみましょうとか、配色をどうしましょうと言ったら、図工です。当然ながら、栄養素の話とか、献立を上手く考えましょう、と言ったら、家庭科です。このように、実は一つのテーマで扱う内容が、子供たちが他の科目で学んでいた、それぞれの知識があったりする内容から少し関連させて話題を広げていだけで、実は子供たちの知的なレベルに合ったようなものになっていくのです。

もう少し具体的にどのような形で、どのようなことを目指すのか、目標としているのかという話をします。まず、これが、これまでの小・中・高等学校の学習指導要領での文言です。小学校に関しては、5、6年生で外国語活動が行われてきました。その中で、外国語を通じて言語や文化について、体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う、ということが目標でした。その中にポイントが3つあり、まずは言語や文化について体験的に理解をする、そして積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てていく。そして、表現とか音とかには、慣れていきましょう。それが、コミュニケーションの素地なのです、というのがこれまでの5、6年生の外国語活動の目標でした。それが、今度はどうなるのでしょうか。外国語活動という意味では、小学校3年生、4年生の中学年になります。実は、

コミュニケーションを図る素地となる能力、資質・能力を育成するという意味では、先ほどと目指すところは同じです。その素地を身に付けましょうということです。そして、外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語の音声の違いについて気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。そして、身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合う素地を養う。外国語を通して、その言語や背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う、ということです。

先ほど出てきた文言と、少し似たところもあると思います。思い出していただきたいのが、先ほどの三角形の3つの柱です。例えば1番目というのは、表現が理解できる、音に慣れ親しむ、ということ。これは実を言うと、先ほどでいう「知識・技能」です。2番目は、自分の考えや気持ちを伝える。自分の頭で考えたことを、相手に伝える、それは「思考して表現する」ということです。そして、3番目が、相手に配慮しながら、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションに向かっていこうとする力」です。

先ほどの目標に比べると、今度の新しい指導要領の目標は、文字的には3倍ほどに増えていますが、実はこの3つの柱が具体的にこのような形で示されていて、それが何をすべきかが、明示的に書かれています。同じような形で、5、6年生でも、1、2、3というところがそれぞれの3つの要素というところに対応していますし、実はこれは小学校だけではなくて、中学・高等学校の目標も同じような形になっています。

そして、目標の改善という形で少し文言が難しくなっていますが、外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではない。つまり、知識を付けるだけがメインではない、ということです。児童生徒の学びの過程に、全体を通して知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて、活用される。学んだことを実際に使ってみましょう。そして、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得されて、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら、育成されることが必要である、ということが学習指導要領の改訂に書かれています。

もう少し簡単に図式的に言うと、まずは「知識・技能」、これが必要です。でも、これを身に付けるためには、言語活動を通して行います。実際に話したりすることによって、自分たちの「思考力・判断力・表現力」を身に付けていきましょう。つまり、コミュニケーションを図ることで知識・技能を活用していきましょう、ということです。そのようにして何度も使っているうちに、段々と内容の理解が深まっていくのではないだろうか、そして、そういったプロセスにしてください、とされているのです。

さらにその先に行くと、学習指導要領の改善・充実ということで、まず先ほどの語彙のところでお話したように、児童が受容するものと発信するものをまず区別してください、とされています。つまり、出てきたものを全部覚えなさいということではない、ということなのです。そして、5、6年生では文字の読み書きが入ってきます。でも、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や、基本的な表現について、音声と文字を関連付けて指導しましょう、ということになります。つまり、この単語は、何回も、何回も耳で聞いてわかっています、理解できています、言えています、この表現をもうすでに音声だったら問題ありません、といったものが、文字で書かれるとどうなのか、ということをやっていきましょうということです。つまり、今まで見たこともないような文字が読めるようにしなさい、といったことは求められていないわけです。例えば表現としてThank you.という言葉、もうそれは聞けば当たり前のように理解できるでしょう。でも、それが文字で書かれていたら、例えば次の3つのうちのどれなのかということがわかる、そういったところがまずは大事だということです。

もう一つ大事なことは、文の指導に関して、文法の用語や用法の指導を行うのではないのです。先ほど受動態と能動態を中学校で学んで、という話をしましたが、それは小学校ですることではありません。むしろ言語活動の中で、基本的な表現として、繰り返し触れることを通じて指導して、何回も、何回も使いながら、自然と身に付けていきましょう、ということです。これも今までの『Hi, Friends!』でも、あるいは『Let's Try』などでも、例えば過去形を扱うにしても、「go

の過去形がwentです」と教えましょう、ということは言っていないわけです。むしろ、「どこかに行きました」と言った時に、I went to ～.が、「どこに行きました」、という意味ということです。これは、「何かが好きです」と言うときには、I like ～.と言うんですよ、というのと全く同じレベルで考えていけばいいのでないですか。それを、goとwentの対比で言うのは、中学校に行ってから学べばいいということなのです。

そして、もう一つ大事なのが、文法です。難しい言葉で言うと、「宣言的な知識」と「手続き的な知識」を区別する必要があるということです。これはおそらく、文法の知識を考えたときに、先ほど言った宣言的な知識 (declarative knowledge)、そして手続き的な知識 (procedural knowledge) です。皆さん、自分の日本語を考えてみてください。私たちは日本語のネイティブスピーカーです。例えば私は今、日本語を話しています。そして、皆さんがその日本語を聞いています。その時に、「僕が話した時に使った、一つ前の文の動詞の形は未然形でしたか?」とか、「連用形でしたか?」と言われても、実際に自分が何を言ったかも覚えていません。つまり、そういった文法の知識と言った時には、その活用として何だろうとか、何かそんなのが言えるか、言えないかということは関係ありません。実は日本語の正しい文法を使っているのです。でも今、言ったように、その活用は?と聞かれたら、正確には言えないのです。つまり、使えるようになる文法の知識と、それを説明するための文法の知識とは別であるという話なのです。つまり、宣言的な知識というのは、説明のために必要な知識であって、手続き的な知識というのは、使うために必要な文法の知識なのです。

ですから、私たちが小学校で児童に指導するときに、宣言的な知識を教える必要は全くありません。先ほど話したように、過去形とか、eatの過去形はateとかいった宣言的知識を付ける必要ありません。でも何かを食べたときに、I ate ～.と言えるということ。それは、手続き的な知識を身に付けたということです。文法が必要ないとは、誰も言っていないのです。とても大事だけれども、そこに名前を付けて覚える必要はないんです。例えば、何かに子供たちの興味があるときに、I'm interested in ～.という表現を覚えたとします。それが受動態であるということを知る必要はないし、このinterestedが過去分詞だということを知っている必要はありません。でも、表現として言えるようになっていくことが大事だということです。つまり、文法指導とは、文法用語を教えることではないということです。この辺も明確になっていることも今回の学習指導要領において大事な点です。

では、実際に、どのようなことを各レベルで求めているのでしょうか。

まずは、「聞くこと」です。4技能とよく世間で言われますが、4つの技能うちの「話すこと」が「やり取り」と「発表」の2つの領域にわかれてきました。これもCEFRの中では、spoken interaction、spoken productionという言い方をしていますが、要するに友達で意見の交換をするということです。例えば、「これ、好きですか?」「いや、嫌いです」というのは、「やり取り」です。一方で、人前でまとまった話をする、スピーチをするのは、同じ「話すこと」でも違いますよね。それらを2つに分けましょう、ということです。4つの技能の5つの領域というような言い方が学習指導要領の中でされていますが、それで「話すこと」の技能の2つにはそれぞれ目指すところがあるということです。

そして、「読むこと」は中学年では扱わないので、ここでは2つになっています。「書くこと」も同様です。一体何を学ぶのかというところを、後でゆっくり確認をしてもらえたらと思います。例えば、「書く」ということに関して言うならば、きちんと文章が書ける、といったことは言っていないのです。小学校では、まずは、見ながら書き写しができる、ということができればいい。あるいは、書き写したものの、例えば1カ所を別のものに言い替えてみる。例えば、I like an apple.と書き写して、別の果物が好きな子は、そこをbananaなどに変えて書いてみる、ということまでができればよいことが言われています。いわゆる作文指導とは、全く違うということ、確認しておいていただきたいと思います。

「聞くこと」については、もう少し詳しく見たいと思います。まず、ゆっくり、はっきり話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞きながら、聞き取れるようにする。ゆっくり、はっきり話された際に、自分に身近で簡単な事柄に関する、基本的な表現の意味がわかるようにする。物を表すような簡単な語句を聞いてわかる。まず例えば、appleと言われた時に、それが何かがわかる。これが最初のレベルの聞き取りです。

次に、簡単な基本的な表現がわかる。Thank you.と言われた時に、それがどういうことがわかる。

そして、文字の読み方、例えばCやA、Bなどと言われた時に、それが何かがわかる、聞き取れるということです。それが高学年になった時に、最初は、ゆっくり、はっきり話されて、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるということです。つまり、先ほど中学年のアとイで目標としていたものが、高学年のアの、表現が聞き取れる、あるいは語句が聞き取れる、というところでまともになっています。

次は、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報が聞き取れるということが、求められるレベルになります。そして高学年になると、ゆっくり、はっきり話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要が捉えることができる。つまり、情報が聞き取れるということは、明日の東京の天気は何かと聞かれた時に、それがsunnyなのか、cloudyなのかということ、一語一句文でわからなくても、基本的な情報がわかる。「今何時ですか?」と聞かれて、「4時です」と答えるときに、fourという数字がわかる。そういった情報がわかるということです。最後は、概要が聞き取れるということです。例えば、先生が絵本のような物語の読み聞かせをした時に、大体こういうお話だということがわかるのが、小学校の最終的な聞き取りのレベルです。

それが中学校に行くと、まず、必要な情報が聞き取れるということです。そして、先ほど、ここで小学校高学年のイとウの目標になっていたところが、中学校のアとイのレベルというところで、情報が聞き取れる、そして概要が聞き取れる、ということです。そして、小学校と中学校の違いとしては、小学校では「ゆっくり、はっきり」話されるものが聞き取れて、中学校では「ゆっくり」が取れて、「はっきり話される」という形になっているところが違いになります。そして、中学校のイとウの目標というのが、日常的话题の概要がわかる、それから最終的な段階、中学校3年の終わりには、社会的な話題についての短い説明の要点が捉えられる。つまり、日常的话题がわかるのと、少し社会問題であるとか、実際中学校の教科書を見ると、温暖化の話や、環境問題の話など、社会的な話題が入っています。そういったものがわかるということです。

では、小学校・中学校から、次の段階として高等学校を考えたときに、これがどうなるかということ、実は同じように日常的话题について聞き取れる。社会的な話題について聞き取れることになっているということです。つまり、一つ前の段階から次の段階に行った時に、例えば前の段階の2番目3番目で目標に上がっていたのが、次の段階の1番目2番目の目標になっていたりするのです。それで、高等学校に行くと、1年生では多くの支援を活用すれば、つまりいろいろなヒントがあれば、そして2年生になると一定の支援があれば、さらに高3になると支援もほとんどなくてもそれができる、という形で、レベルが上がってきているということです。

まとめると、小学校から高等学校に上がるにしたがって、レベルも上がっていきますが、それがバラバラに存在しているわけでないということです。むしろ、これはある種の入子型みたいな形になって進んできて、オーバーラップするような部分というものが必ずあり、前のところを元にして、次のレベルに進んでいくというような形にしていく。なので、先生方としては、教えるにあたり、自分が今やっているものが、次にどういう形でつながっていくのか、あるいは自分が今教えている生徒たちは、その前にどのようなことを学んできたのかということ意識することが大事なのです。そして、オーバーラップしながら話をしていく、少しずつ進んでいくというところ。そのところを担保することによって、できるだけ取り残されないように、子供たちを置いてきばりにしないように、していこうということです。

そういった力を身に付けるためには、どのような活動をしていくのでしょうか。言語活動、これがコミュニケーションの力を身に付けるということです。全てにおいて求められている大事なことは、社会に出て活用できるように使える力を身に付けていくということです。そのためにはどうするかというと、例え話をすると、自転車が乗れるようになることを考えたときに、誰しも初めから乗れるわけではありません。とりあえずまたがって、何度か転んでひざ小僧を擦りむいたりしながら、段々みんな覚えていくわけです。つまり、自転車が乗れるためには、このような英語というのも自分で使いながら、身に付けていく。使いながら覚えていくことが大事なのです。難しい言い方をすれば、帰納的な学習をしてい

くことが、大事になってくるということです。帰納的に学んでいくということは、ただ単に公式的なものを暗記するだけではなくて、実際に活動の課題を示して、コミュニケーションの目的や場面状況、どんなときに、誰が何のために言うのか、といったことを意識する。つまり、実際の使い方を意識しながら学んでいくことです。それは小学校の中学年から、高等学校までずっと通して同じであると言われていました。ただ、レベル的に求めるものが違って、小学校中学年では、情報や考えを表現できれば、つまり思ったことが口に出せばいいのです。でも高学年になったら、ただ単に思ったことを口に出すのではなくて、それをちょっと整理してから口に出しましょうということです。

それが中学校に行くと、それを整理したうえで、ロジカルな形で表現しましょう、となっています。

さらに高等学校になると、とにかく言えればいいだけでなく、それは友達同士で話している場面なのか、目上の人と話している場面なのか、適切な表現を使って、ロジカルに話をしましょうということで、だんだん課せられるものが増えていきます。

ここで言ったように、場面や状況、目的というのは、一言で言うと、文脈、コンテキストというような、何のためにこの言葉を使うのか。例えば、受動態と能動態というようなことを、今まで中学校でよく書き換え問題とか、ドリルとかやった人も多いのではないかと思います。でも何のために受動態を使うのでしょうか？ 何のために能動態を使うのでしょうか？ どんな場面で使うのでしょうか？ そういったことを、あまり意識して来なかったかもしれません。例えば、「花瓶があります」、ということで、I broke a vase.と言ったら、何か私が意図的にそれを壊したように聞こえます。しかし、本来はThe vase was broken.です。そういうことを学ぶにあたって、小学校段階では、写真やイラスト、文脈を見ながら、聞き取りなども学んでいき、具体的な情報もどういった状況の中で言われている情報を聞き取るのかを考える必要があると言われていました。

これは、中学・高等学校に行ってもずっと同じことですが、中学校で言われているもう一つ大事なことは、聞いて要点を把握して、その内容を英語で説明する活動というのが、「聞くこと」なのです。つまり、聞いて終わり、ではないのです。聞いたものは、こういうことがあったとか、昨日テレビでこんなこと言っていたということを、人に伝えるところまでが、実はリスニングなのです。高等学校も同じです。情報を聞き取ったら、最終的にはそれを話し合ったり、書いたりして伝えるところまでいって「聞くこと」なのです。つまり、なんとなく受身で終わるのではないということです。きちんと自分なりに、積極的に使っていく、というところまでもっていくということです。

次に、「読む」活動ですが、小学校段階ではまず文字が何となく見てわかるということが大事です。それから必要な情報には何が書かれているのかわかるとか、そういったことをまずは小学校ではできればいいのです。ですから、読み書き指導というところでは、それ以上難しい事は特に求めていないということを先生方にはまず認識していただきたいと思います。それが中・高等学校になると、さらに上に行って、黙読や音読、情報を聞き取るといったことをして、最終的には高等学校も同じで、中学校では内容について、読んだことについて賛否の意見を自分で述べる。高等学校でも、そうして話し合いなどをするということです。つまり、受けた情報を発信していくところまでいって初めて完結するということです。

まとめます。最初のビデオの大和田先生の話では、彼も決して英語のエキスパートではなかったかもしれません。普通のどくどく一般的な先生だと思います。ですが、彼が自ら積極的にALTと関わり合っていく姿を見せて、そして子供にこういう形で語り合っていく。つまり、こういう中で子供たちが、何も臆することなく、その話されている英語を聞こうとする態度もその中で生まれて、そしていろいろな活動を通してきちんと自分の言いたいことをまずは伝えるということです。思ったことが口に出せるようになっていくこと、それがきちんとした文脈の中で行われていました。非常に短期間でそのように変容していったところが見て取れることになり、もっと時間をかけていけばさらに変わっていったかもしれません。これから先生方が、いろいろな形で子供たちと英語を通じて接する時に、決して先生方が英語のエキスパートである必要は必ずしもありません。皆さんは、英語の見本である必要はないのです。それは、場合によってはALTかもしれないし、DVDなど様々な電子デジタル教材みたいなものを活用していったら、そこで正しい見本のようなもの

は得られるのです。

では、先生方がすべきことは何でしょうか。英語を使う人の見本になっていただきたいということです。つまり、ALTとのやり取り、あるいは生徒とのやり取り、他の科目を教えている、算数を教えている、国語を教えている時は、当たり前のように日本語を使っている。でも、外国語の授業になった時には、当たり前のような顔をして英語を使っている。その姿を見せることによって、子供たちが、これから自分たちが大人になったら日本語を使うときは当然日本語で話すけれど、英語を使う場面になったら英語を話すのが当たり前だよ、と思えるようになる。そのような思いになって、親しみながら、いくつかの表現に慣れていくという形で、少し使えるようになっていく。そして、別にそこで理屈はその段階ではわかっていなくてもいい。思い返してみたらあんなだったよね、ということ、中学校や高等学校で文法の授業の中で振り返って理解する。その部分が英語の素地であり、基礎であり、身に付けられればよいと思います。

実際の具体的な活動内容、その他に関しては、これから4回の講座で、さらに最後は評価の話、それを活動させたものをどう見ていくのかということまで含めて、評価をするときも、目指されているものが何かとわからないと、評価は付けられません。例えば、知識のことはばかりテストして、成績を付けるというのが、今回求めているもではないということが、おわかりいただけたと思います。パフォーマンス評価とは何だろうか、ということが理解されて初めてつながっていくのかと思います。最初に話したように、ここをある種の前段階として、残りの講座を聞いていただければと思います。

最後に、今日の話聞いたうえで、さらに先生方に事後タスクという形で考えていただくのは、それぞれが使っている検定教科書の中にいろいろな活動、アクティビティ、問題などがあると思います。それぞれの活動や問題、エクササイズなどは、一体何をさせようとしているのだろうか。その目的は何なのだろうかということ、これまでお話ししてきた学習指導要領の内容や、これはこういうことを子供たちにさせたいから、こういった活動させているのかということ、同僚の先生方と話し合いをしていただければと思います。そこが見えてくると、実際に授業で何をすべきなのか、どういうことを求めるべきなのか、ということが見えると思いますので、今回は子供に何を求めるのかということをお考えつつ、改めて教科書を見直していただければと思います。

配信スタッフ：

藤田先生、ありがとうございました。それでは、横手市の会場で、ご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか？

秋田県横手市(会場：雄物川小学校)：

横手市立朝倉小学校の高橋と申します。今日はありがとうございました。先生のお話の中で、今回新しい学習指導要領に明記された、聞いたり読んだりする事項と、話したり書いたりする事項という風にあったのですが、授業を展開していく中で●●(この箇所聞き取れず、一部不明)に重きを置きながら、●●(この箇所聞き取れず、一部不明)指導に当たっていったらいいのかなと思ったのですが。用語の受容語彙と、産出語彙のところ、お話いただけたらと思います。

藤田先生：

はい。受容語彙と産出語彙は、初めから区別されているものではありません。子供たち自身が言いたいことは何なのだろうか、ということですね。言いたい表現というのは、例えばその単語のレベルが、大人からみたら難しいと思えるものであっても、子供たちは言いたい、ということがあるかもしれないですね。それはひょっとすると、産出語彙につながっていいのかもしれない、ということになります。ですから、教科書の中でそれぞれの課で、いろいろな話題が出てきていると思いますが、まずは理解ができるということ、つまり受容できるという部分をメインに、まず指導していただくことが大事だと思っています。

その中で、どうしても、ここに関して表現するためには、この内容について話すためには、こういうことを言わなければならない、ということがある程度限られてくると思うんですね。例えば果物なら果物、野菜なら野菜の名前がたくさん

出てきたとしても、それを1から10まで全部覚えなければならない、ということではなくて、その中で言えるのがいくつかあればいいんだ、というくらいなのです。逆にそれを、子供たちに全部覚えなさいという話になると、それこそ子供にとっても負担感が増えていって、英語が嫌いになるということがあります。あくまでそこは、言ってみれば、手持ちの札として、あるいはワードバンクのようなものとして、こんなにたくさんのリストがあるよ、ということになります。その中から好きなものを選んでいってごらん、という指導をしていくうちに、無理やり覚えようと言わなくても、段々と言えるようになってくる。それこそ、小さい子供が、大人でも舌を噛んでしまいそうな恐竜の名前などをスラスラと言えることがありますよね。それと同じで、言いたいことがあれば、自分でもどんどん言うようになるし、何回も言っていくことによってスラスラ使えるようになります。それこそまさに、使いながら覚えていく、ということにつながると思います。

ですから、先生方の指導としては、まずは、むしろ理解ができるという方を主眼にして授業を展開していただき、その中で言いたいことは、これを言いなさい、ではなく、あなたの好きなものを言いなさい、という形に持っていくのです。それによって、お互い負担感を感じずに指導が進めていけるんじゃないかなと思います。

横手市：

ありがとうございました。

配信スタッフ：

ありがとうございました。続きまして、足立区 皿沼小学校、いかがでしょう？

東京都足立区(会場：区立皿沼小学校)：

足立区立皿沼小学校の星野と申します。今日はありがとうございました。私もお話を伺って、受容語彙と産出語彙の導入について、表現の幅を広げるための活動、受身、言葉を広げるために身に付けることが大切だという風にお伺いして、私も少し、外国語を身近に感じることができました。その中で、小学校の外国語活動を子供たちに教えていく中で、もどかしさを感じる時があるのです。

「今日は何を食べましたか」、という話をする場面で、例えば、ある子供がI eat apple last night.と言ったら、昨日りんごを食べたんだね、よかったね、と私は理解することができるんですが、でも、それは文法では正しくは、eatではなくて、ateであって、それを子供たちに伝えるべきなのか、また活動の時に、それは過去形なんだよ、と文法的に教えてしまえばいいわけなんですけれど、それを小学校で教えるのは違います。どのように子供たちに言ってあげると、子供たちも英語が難しい、ではなくて、そういうことがわかって楽しいぞという、ワクワク感で理解させることができるのかなという、もどかしさを感じています。何かいい方法やアドバイスがあれば教えてください。

藤田先生：

多分一番やってはいけないのが、先ほど話したような、宣言的知識のような形で、それはeatじゃなくて、ateだと言われたら、子供たちは、多分話す気がなくなってしまうと思うのです。そういう意味では、それはやっぱり避けるべきだと思います。

その代わりに、例えば子供がyesterdayという言葉覚えて、昨日の話なんだということがもうわかっているっていうことを前提で話をすれば、例えばI eat apple yesterday.と言った時に、先生の方がそれに普通に英語で答える形で、Oh, you ate an apple yesterday. Was it good? といった形で問い返してあげる。食べたんだね、という形でYou ate an apple?と聞き返してあげる。大事なことは、教え込むのではなくて、子供たち自身に気づきをもたらす、ということなんです。そうすると、多分ateっていうのはどこかで出てきていたと思います。ですから、そういう文脈で、eatやyesterdayと出てきているはずなので、先生から、ここがダメでしょう、と自尊心を傷つけることもなく、ああそうなのね、と問い返してくれた。そうすると、子供たち自身も、そういえばこの間そんなことを習ったかなあ、のように思い出していく。それは1回で正しく直せるとは限りませんし、次もまた同じ間違いをするかもしれませんが、それでも先生が自然な形で、同じように言い直してあげる。言い直すっていう時も、こう言いなさい、ではなくて、あ、そうなのねと問い返す。これは、

「recast」という手法なのですが、そのようなことをやってコミュニケーションを止めずに、そのまま話をしていく。ただし、先生の方から発するとき、正しい形ものを与えてあげる、インプットしてあげる、ということが続けていくうちに、子供たちがだんだんと、自ら気付いていく。そして、自らこのように気付いて学び取っていく力が、もしかすると、学びに向かう力につながっていくことにもなるのかなとも思います。そのようなやり方がもしできれば、いいのではないのでしょうか。

皿沼小：

ありがとうございました。

配信スタッフ：

足立区 亀田小学校、何かありますか？

東京都足立区(会場：区立亀田小学校)：

亀田小学校です。2人、よろしくお願いします。

亀田小：

亀田小学校6年3組●●(この箇所聞き取れず、一部不明)です。普段、外国語専科の先生やALTの授業にすごくこう、すごく単純な質問かもしれないんですけど、オールイングリッシュの方がいいと聞いたことがあって、苦手な先生も、オールイングリッシュを目指すべきなのか、あるいは日本語を交えながらでもいいのでしょうか。

藤田先生：

もちろん、オールイングリッシュで、一から十まで全部英語のできるのであれば、それでやっていただくのは全然それは構わないと思います。先生ができるだけ英語を使いましょう、というのは何のために言っているのでしょうか。日本の普通の環境に育っている子供たちにとって、英語に触れる機会って、学校の外、あるいは家庭ではほとんどないですよ。たまたまコマーシャルなど、テレビなどを見ている時に少し入ってくるくらいで、日常生活で自分たちが直接英語で話しかけられることは、ほとんど無いのです。そうすると、子供たちが英語に触れられる場所はどこかと言ったら、もしかすると英語の授業中しかないんですね。だからその意味でも、できるだけ多くのチャンスを与えてあげたい。だから、先生たちもできるだけ英語を使って、生徒たちが耳にする機会を増やしてあげましょう。

そしてもう一つ大事なことは、先ほど言ったように、先生たちもひよっとすると、英語を間違えるかもしれない。発音も別にネイティブみたいな発音じゃないかもしれない。でもそうやって、自分が英語苦手だから嫌だ、って逃げ出すのではなくて、当たり前のような顔をして英語普段から使っているよ、というその姿を見せてあげる。それによって、子供たちも別に英語を話すことというのは、恥ずかしいことでも怖いことでもなんでもないんだよ、というロールモデルを見せてあげる。それが、先生が英語を使うことの2つの大きな意味合いですね。

一つは、インプットの量を与えること、もう一つはロールモデルとして、子供たちにその姿勢を見せるということ。そう考えたときに、だから、できる限りのものは使って、使える部分では使ったらいいと思います。ただし、何も100%英語でしゃべらなきゃいけないかと言ったら、そんなことは全然ないと思います。少なくとも、Classroom Englishと呼ばれる、要するに指示ですよ。Open your textbooks, page ~であるとか、いくつか決まった表現って、ありますよね。そういった定型表現みたいなものであれば、ある程度限りがあるわけです。10とか20とかある程度覚えておけば、少なくとも指示を出すにはそれで十分です。あとは、それに誉め言葉を、バリエーション2つ、3つ覚えておくとよいです。Goodばかりだとちょっとな、と思ったら、もう少し別の言葉も足してみようかなとか、そういったことをしながら話してみる。あるいは、打ち合わせ時間が取れるのであれば、ALTとのやり取りの中で、事前に話をしておいて、それやってみる。それだけでも、生徒から見たら、先生やっぱりすごいね、と思うんですよ。先ほど、大和田先生のビデオの例もしましたが、彼だって英語が話せるか、と言ったら必ずしもそうではないと思います。でも、子供たちの前で話した時には、特に後半の部分では自信をもって結構話しかける、ということをしていましたよね。それぐらいのことができるようになればいいのかな、と思います。それをやっているうちに、もしかすると、教室の中で、生徒以上に先生が、

一番練習ができてしまうかもしれません。実はそうやって指導をすること自体が、先生自身のスピーキングの練習にもなっているのです。そうすると1年が経った頃には、かなり決まった表現についてはスラスラ言えるようになる。それが、去年やって今年もやります、となったら、去年以上に今年ではできるようになる、という積み重ねで、3年くらい担当しているうちに、かなりのものを使いこなせるようになるんじゃないかなと思います。別に難しい話を振られて、全部話ができるようになる、ということではないので。本当に限られた今日のレッスンで必要なものはこれだよね、ということから、自信がない先生方も始められたら十分なんじゃないかなと思います。だから、本当に決まった指示の表現と、ちょっとした誉め言葉みたいなものからスタートして、そこからだんだんと足していくというのがいいのかな、と思います。

亀田小：

ありがとうございます。もう一人よろしくお願いします。

亀田小：

教科横断的学習について、とてもよいなと思っているところと、どうしたらいいのかなと迷っているところがあります。小学校の教員が英語をする一番の利点はやっぱり他の教科と絡んでできるというのが、やはり小学校の強みだと思います。一方で、他の教科で例えば子供が発表するときに、他の教科では自分の言葉で日本語でいろいろ工夫して発表できていることが、英語だとそこまで上手くないという子供のジレンマがあって。どうしてあげたらいいのかな、いつも思うんです。

例えばさっき見せていただいた、食物連鎖のことがあったんですけど、5、6年生に今教えていて、理科でもうすでに習っているんで、子供たちは頭の中では食物連鎖のこともわかっているし、こういうことを言いたいとか、知っているというのを英語でも言いたいわけなんですけれども、自分の日本語の知識と、英語でどうやって言ったらいいかの差異が出てきてしまって。結局子供が言いたいけれども、言えない。全部言おうとすると、難しい言葉になってしまって、子供たちがわからない。その辺をどのようにしてあげたらいいのかな、いつも思います。

藤田先生：

今の話は、すごく大事な問題だと思うんですね。先ほどの受容語彙と、産出語彙の差ということと、同じような話だと思います。つまり、結構わかっているけれども、言えない、というところは。その中で、これは先生方にお願ひせざるを得ないかもしれないんですけど、日本語をどう易しく日本語で表現できるか、というのは、ひょっとするとすごく大事になってくるのではないかという気がするんですね。食物連鎖をそのまま訳せ、と言われたら、難しい言葉になるかもしれない。でも例えばこれを、順番に本当に単純な表現で、大きな魚が小さな魚を食べるとか、魚をこの動物が、クマが食べる、そのクマを…、というような、A eats B, B eats C,といったそのくらいの表現をつなげていくことによって、少なくともコンセプトとしては、表現できるようになるのかもしれない。なので、その日本語をどこまで逆に言うということは、日本語として分解できるかということです。

絶滅危惧種なんていうと、それこそ難しい言葉になってしまうかもしれないし、それを説明するのは難しいのかもしれないですね。例えば、グラフとかを見せながら、インドにいる自然のトラの数という話をして、数字を見せて、1960, there is なんとかtigerでも、in 2020, there is なんとかtiger in Indiaとか、表現としてはthere is とか、過去形使ってもいいんですけど、1960年は何頭います、2020年は何頭います、と言えればそれだけでも数が減ったよね、ということ、そこでdecrease なんとかとかかって、言えれば言ってもいいんですけど、もし言わなくても、何が言いたかったことは伝わっていきますよね。しかもその時に、表現として英語だけ、言葉だけで伝えようとせず、そこで一緒にグラフみたいなものを示す。これもすごく大事なコミュニケーションだと思うんですね。そのようなことを、どう分解することができていくか。そのように難しい言葉を日本語でも易しく言い替える力が身に付いている人っていうのは、その後高等学校、大学とかあるいは社会人になってから英会話をするとき、実は英語のコミュニケーションが上手くなっていく、ということがあります。とにかく、一対一対応で、この日本語に対してはこの英語である、のようなことを

覚えなきゃいけない、そういったある意味呪縛から、小学校の早い段階で解いてあげることによって、中・高に上がったからもっと難しい内容をディスカッションする、ディベートする、ときに助かっていくのです。

実際大学生を指導していると、やはり中・高の段階で英語を普段から話して授業を受けていた子たちと、そうでない子たちは、授業の様子を見ていても、そこが明らかに違うんですね。なので、そこが、英語が話すのが上手いか下手かでないんです。あるいは、単語をたくさん知っているか、いないかではない。何かを言うことに、慣れているか慣れていないか。ここの部分が、実は大事なのです。ましてや小学生ですから、ここでそんなに正しい英語を話さなければならないとか、入試とかそういったプレッシャーは考えなくてもいいわけですから。とにかく、簡単なことでもいいから、まず言えるようにしてあげる。そして、先ほども言ったように、もし発表活動とかで、そういった難しい食物連鎖のなどをいう時に、ここは英語で言います。でもここに関しては日本語でもいいよ、といった形でちょっと混ぜてあげるというのも、場合によってはいいのかなという気がします。変にぐちゃぐちゃに混ぜてしまうのはよくないかもしれませんが、例えば、背景説明は日本語でした上で、でもグラフの説明だけは英語でやります、という目的をきちんともった形で日本語を使う、英語を使うということができたら、発表ももう少し充実していくし、先ほど言われたモヤモヤや、生徒のフラストレーションも少しは減らせるのではないかなと思います。

亀田小：

どうもありがとうございました。

配信スタッフ：

ありがとうございました。浦安市、いかがでしょうか。

千葉県浦安市(会場：市立明海小学校)：

浦安市立明海小学校で研究主任をしております、川島と申します。よろしく申し上げます。本日はありがとうございました。本日の講座の内容で、まず本校は外国語活動・外国語科を、校内研究として本年度3年目となります。初年度は、先ほどの話にもありましたように、ALT任せであるとか、先生方が自信をもってT1をやるということが難しかったような状況から、今では校長先生のリーダーシップや、明海大学の石鍋教授の適切なアドバイスがありまして、先生方がとてもモチベーションが高く、よりよい授業を作ろうと今頑張っています。

その中で今先生達が困っているのが、今回の学習指導要領の中にありました、目的・場面・状況などに応じてということで、教科書に出ているキーセンテンスですとか、場面の設定ですとか、そういった所がなかなか子供たちの日常に結び付いていないな、と感じています。よりよい授業をするためには、やはり子供たちが実用感をもって、英語を使うという部分をモットーにしております。教科書の題材とちょっとかけ離れたところで、場面や状況の設定をしているんですけど、少しネタに困るようなこともあります。その辺のところをアドバイスいただければと思っています。

藤田先生：

本当に教科書に書かれているその状況だけを使う必要は、全然ないと思うんですね。今、先生がおっしゃった通り、その子供たち自身にとって、何が身近であるかというのは、学校によっても違うし、地域によっても違うのかなと思います。例えば、浦安市で、ディズニールランドがすぐ近くという状況と、別の地域で遊園地がすぐ近くに全くない、というところでは当然状況が全く違うというのは、当たり前の話だと思うんですね。そのような中で、先生方がそうやって状況をいろいろ苦労して考えられています。でも、場合によっては本当に困った時には、もしかすると変な話、児童に投げてもいいのかなという気も少しするんですね。つまり、どういうことかということ、いつも児童たちが先生たちから与えられるだけじゃないということです。例えば、何かある特定の場面みたいな、教科書に書かれていることがあります。そういった時に、どのようなものが実際にあるだろうね、ということ子供たちに聞いてしまうのです。それを基にしながら、次の授業で先生方の準備も大変でしょうけれども、例えば、振り返りシートみたいなそういうような中に、こういうようなことに関して、皆さんだったらどうしますかとか、こんなことを何か試したことがありますか、とか、ちょっとしたそういっ

たアンケート的な質問のようなものを少し入れておくのです。そうすると、子供からそうやって引き出してくる、何も難しい考え方だけではなくて、その子供にとって、大人がこうだろうと思っている場面と、子供たちが思っている場面って、必ずしも一致しなかったりします。例えば買い物をするといった時に、大人が考える買い物をする場所と、子供たちが買い物に行く場所すら、ひょっとすると違うかもしれないですね。ということは、逆にそうやってネタに困った場合は、子供に聞いちゃうっていうのもアリかな、という気がします。

あとは、少し現実離れはするかもしれませんが、もう一つの手としては、あえてむしろ離れてしまって、空想の世界、物語の世界みたいなものを活用してしまうのです。そうすると、なかなか現実的には難しいような場面、これが魔法の国の世界だったらこうです、とか。例えば、恐竜がいる古代に今タイムスリップしている、こんな状況です、のようなすごく非日常的なようにしてしまうと、ある特定のものというのがなかなか普段の生活の中では出てこなさそうな時に、こういうのできるんじゃないかと、あえてファンタジーの世界とか、空想の世界のようなものを使ってしまうのです。動物になってみた場合に、なんていうようなことをやってみたりすると、一種の「ごっこ」みたいな形になりますが。

普段の目指したもののだけではなくて、そういった遊び要素みたいなものを取り入れると、逆に子供たちがノリノリでいろいろ言ってくれたりなんてことになるかもしれません。そういった工夫をされてみてもいいのかもしれないかな、という気がしました。

浦安市：

ありがとうございました。

配信スタッフ：

ありがとうございました。藤田先生、最後の一言をお願いいたします。

藤田先生：

今回初日、5回の中の第1回目ということで、この学習指導要領の理解ということを中心にお話をさせていただきましたけれども、途中でも申し上げた通り、まず先生方に一番申し上げたいのは、あまり自分が英語を、外国語を話さなければならないんだということ自体にプレッシャーを感じる必要はありません。むしろ、その言葉を使って何かを言いたい、という気持ちを育てていく。そして、そういった形で、子供たちも逆に言うと、外国語を通じて言いたいことを言う、ということができるようになってくる。先ほどのご質問の中にもあった通り、日本語だったら言えるのに、英語だと言えない。これは、逆に取れば、英語だと言えないけど、日本語なら言える、ということにもつながってくると思うんですね。他の科目を勉強している時に、理科の勉強、社会の勉強、国語の勉強、あるいは算数の勉強何でもいいですけども、生徒からいろいろ言いたいもの、英語ではなくて日本語なんだから何でも言えるよね、というように、逆にそういった形で表現をするということを、他教科でもどんどんしていくのです。このコミュニケーションという言葉が、この外国語科の中でも非常に重視されているのです。そして、全教科に関しても言語力という形で、学習指導要領の中で語られています。そうやってまずは、日本語だとか英語だとかいう区別なしに、子供たちが表現をきちんとできる、考えて表現する、ということができるようになる。そこが相乗効果だと思うのです。英語でそのようにして訓練をして、足りない部分は日本語の他の教科でたくさん話をする。そこで話をするという癖が付くことで、英語の授業でも何かいろいろ言ってみたい、とつながっていく、そういった形になっていったらいいのではないかと思います。

なかなか先生方お忙しいと思いますし、大変だと思いますけれども、ぜひこれからの子供たちのために、頑張ってくださいと思います。本日はどうもありがとうございました。